

メコン河流域の開発、環境、生活、自然、援助を考える

## フォーラム Mekong

### 世銀融資決定から 25 年一終わらないパクムンダム問題

タイのパクムンダムは、メコン河の支流ムン川に建設された。1990 年に既に建設が始まっていたこのダムは、地元住民だけでなく、国内外の NGO から、メコン河流域でのダム開発の行方を左右する事業として強い反対を受けていた。1991 年 12 月、世界銀行はこのダムの建設費用を含む第 3 次電力システム開発に対し融資を決めたが、反対の声に押され融資決定は通常の手続きでは終わらず、理事会での判断までもつれ込んだ。理事会ではアメリカ、ドイツ、オーストラリアが反対、カナダが棄権、日本や途上国の賛成で融資が決まっている。

反対の声が強かったこの事業に世銀が融資を決めた背景には、メコン河流域にダムが作れなくなることを懸念した当時の日本政府の意向が働いていた、と現地で報道されている。同ダムは住民や NGO の懸念通り、大きな環境・社会影響を引き起こした。融資から 25 年目、現地では未だにダムの影響に苦しむ住民が、ダムの放棄を求めている。



水門を開くパクムンダム (2015 年 10 月 28 日撮影)

#### 主のいない家

パクムンダムに一番近いファヘウ村で目につくのは、あちらこちらの家の前に、箒が山積み

になっていることだ。「魚獲りの副業だった箒作りが今は唯一の収入源ですよ」。暑さを紛らわすためベビーパウダーを顔中に塗ったラムパイ・

カムラップ(59)は、話をする間も、一時も手を休めない。「箒1本の利益は3パーツ、私は1日30本作ることができる」。一日の収入は90パーツの計算になるが、この額はタイの最低賃金の3分の1にも満たない。



家の軒先で作業をするラムパイ・カムラップ

「今も漁をしているけれど、おかしにする魚が獲れたり獲れなかったりする程度。昔は刺し網3枚と投網1枚で一家が食べていけた。今は道具に5千パーツ投資しても、漁では生活が成り立たない。5人の子供は皆バンコクに出稼ぎに出ています」。

彼女の住むファヘウ村は、パクムンダム建設時に移転した村だ。ダムの当初計画では、移転住民は全体で262世帯であったはずが、2000年の調査では912世帯が移転、780世帯が土地の一部もしくは全てを失っていたことが明らかになっている。不十分な事前調査は事業を経済的に魅力のあるものに粉飾し、彼女の家族のように移転対象にならなかった世帯に、多大な経済的な負担を強いた。

「(ダムに反対する) 学生とNGOが来て教えてくれた。ダムに近すぎてここでは暮らせないと。その言葉通り、工事の爆破作業で村には岩の破片が降ってきた。3年間も交渉し、ようやく子供の移転住居と私の家の移築費用7万パーツを得たが、それでは足りなかった」。

「私たちは最初からダム建設に反対してきたが、聞き入れてもらえなかった。隣村の人と協

力し、岩瀬を爆破するためのダイナマイトを仕掛ける穴に入りこみ、工事を止めることまでしたのに。占拠した工事現場から私たちを追い出すため、誰かに雇われた男たちが銃で私たちを追い立てたりもしました」。1993年のこの事件で、住民1人が撃たれ怪我をしている。

3年かけて家屋の補償を得たものの、ダムの影響で川の魚は激減し、漁師だった子供たちは全員家を離れた。補償住宅の主は、20年以上たった今も、年に数日しか家に帰れない。

ひどい質問かとは思ったが、ラムパイに、あなたにとってパクムンダムとは?と聞いてみた。「地獄ですよ」と、箒を作る手を一瞬止めて、彼女は間髪を入れずに答えた。「ダムができて発展する、豊かになると言われた。でも、最初に私が予想したように、魚が獲れなくなり何一つ良いことがなかった。私の5人の子供たちは小学校6年までしか勉強できず、働きながら通信教育で中卒の資格をとった。私たちの生活はますます苦しくなっている」。漁ができなくなり、都市で低学歴の非熟練者でもできる仕事に就くしかなかった彼らにとって、タイの経済発展と共に生活水準を上げることは不可能だったのだ。

## 村の英雄

ファヘウ村の隣、カンブアイ村でも川沿いにあった住居や学校は移転した。放棄された学校の壁には、今も「勉学とスポーツに励み、コミュニティをリードする」という標語が読み取れる。だが、ここで学んだ人のほとんどは、出稼ぎで村を離れている。

アランヤー・フアンガンは、41歳。20歳のころからパクムンダムに反対してきた。「ダムができて、魚が獲れなくなった。食事の全てを買わねばならなくなった」川だけでなく周辺の森林環境も変わり、誰でも採ることができたタケノコやキノコは消えてしまった、という。「昔はダムに沈んだ早瀬で、お坊さんを招いて『ナオ』

と呼ぶお祭りをしたものです。皆で川に集まって、女性はタケノコや山菜を、男性は投網を打ってその場で料理をしてお坊さんに振舞った。楽しい思い出です。ダムは私たちの文化まで壊した」。

「この村の女性たちは爆破作業用の穴に入り込んで、作業を止めました。母もその一人。村人にとって英雄ですよ」。母のトーンムアン(78)と、横にいた親戚の女性ヌーシン(67)も、一緒に行動していたという。

約40名の決死隊が穴に入り込み、ダイナマイトの上にも座り込んだ。男性では作業員と殴り合いになってしまうからと、全員が女性だった。残りの人は工事用の重機を占領し、女性たちに食事を届けた。炎天下の工事現場占拠は1か月を超えた。それでもダムは作られた。魚が獲れなくなると、アランヤーは子供を両親に預け夫とバンコクに行き、それぞれ家事手伝いやトゥクトゥクの運転手として働いた。



アランヤー (中央) 母トーンムアン (左) ニューシン (右)

「私たちは生活を取り戻すために、ダムの水門を開けてほしいと訴えています」。今は村で農作業をしながら暮らすアランヤーは、ダムのない生活を取り戻す希望を捨てていない。

### 水が足りない？

1100種いるというメコン河の魚のうち100種ほどが、2月から6月にかけてムン川に産卵な

どのために遡上し、10月から11月にはメコン河に戻るというサイクルを持つ。河口から5.5kmのところにてきたパクムンダムは、その移動を妨げ、ムン川の魚の資源量は激減した。ムン川下流域は岩場が多く、農業に向かない土地だ。パクムン水力発電ダムは、ムン川沿いで漁業で暮らす約60のコミュニティの生活基盤を破壊した。影響住民は、数えきれないほどのデモと政府交渉を繰り返し、1995年にダムの工事期間3年分の漁業補償9万パーツを勝ちとった。

だが、工事が終わったら魚は戻ってくると言われたが実際には漁業資源は回復せず、人々は1999年からダムの水門開放による生態系の回復を求め始めた。2年8か月の間、パクムンダムの敷地を占拠して「村」を打ち立てた住民の抗議行動は、世界中の注目を浴びた。10年前にクーデターで政権の座を追われたタクシン首相は、貧困削減を強く打ち出し選挙で圧勝した。彼は首相になってすぐ、バンコクの首相府前で座り込んでいたパクムンダムの影響住民と路上で食事を共にし、ダムの影響の再調査を地元のウボンラチャタニ大学に命じた。だが、政権が盤石になったとみるや、大学の提言した5年間の試験的な水門開放ではなく、調査チームが検討もしていない年間4か月間の水門開放を閣議決定で決めてしまった。一時的に水門を開放した2001年から2002年の1年間で、ムン川の生態系と住民の経済状況は大きく回復したことが、住民の実感からも、大学の調査でも明らかになっていたのだが。

タクシン政権の決めた水門開放時期は、毎年7-10月と決まっていたが、予定通りに開いたのは、2005年のみだ。その後、閣議決定は取り消される。住民は毎年、水門開放を求める抗議行動に生活時間を奪われる。ダムを所有するタイ発電会社や県が、水不足を理由に水門開放を拒否しようとするからだ。パクムンダムは発電が目的で灌漑にはほとんど利用されておらず、

ダムの貯水の有無も上水道の取水には影響しないが、なぜか水門開放は「水不足」を招くとして毎年問題にされる。2015年は干ばつを理由に、8月16日まで水門は開かなかった。その間、水の停滞によって、川の水質は悪化し養殖魚に被害を出している。

### 失われる知恵

「今年のように8月下旬に水門が開いても、ほとんどの魚はメコン河から上がって来られない」、ドンサムラーン村の若手漁師ウィテヤー・トーンノイ（32）は話す。メコン河の魚が支流に入るタイミングは、乾季の終わりから雨季の始めと決まっている。

ダムができて、子供の時から親と一緒にやってきた魚をやめ工場に働きに出た際、交通事故で頭部に重傷を負い仕事を続けることが困難になり、彼は村に戻った。努力すれば魚は獲れるというが、彼の年代で村にとどまり漁をしている人はほとんどいない。漁業だけでは生活が安定しないからだ。彼も、村の周りだけで漁をしているわけではない。「魚が獲れないときは船を車に積んで、上流の支流に出かけます」。



漁具を見せるウィテヤー

彼は父親と一緒にたくさんの漁具をそろえている。今はほとんど見られなくなった、ひょうたんで作った漁具も軒先にかけている。釣り針に餌をつけ早瀬に流し水面近くにいる魚を獲るものだが、ダムの水門が開くのが遅すぎて、今

年は使うことができなかった。

コータイ村は、トゥムヤイという不思議な漁具を使うことで知られている。竹で編まれたこの漁具は長さが7mにもなる。コメを餌に、パーヨンというナマズの一種を獲る。村人は餌のレシピを工夫し、音を使って魚を漁具の中に誘い込む。村にはこの漁に関する様々な知恵が伝わっている。

ウドム・センポム(56)は、腕のいい漁師だが、ここ数年その腕前を披露する機会はない。ダムの水門開放が遅れると、ダムの上流では魚はほとんど獲れない。今年も数人がトゥムヤイを仕掛けてみたが、漁獲がないため数日で漁をやめた。ウドムもトゥムヤイを用意しているが、使う機会はなかった。「一番良いのは4-5月に水門が開くことです。8月では魚は遡上できない」。



トゥムヤイについて語るウドム

今年、コータイ村では長らく中断していた魚の保全活動を再開し、村の船着き場横に保全区を設けた。村人は、このままでは魚が村の周りから消えてしまうと強い危機感をもっている。ウドムをはじめ村人の多くが漁師だった時の生活を取り戻したいと考えており、自分たちが魚を獲るばかりではなく、持続的な利用ができると世間に示すことが必要だと考え保全活動を始めた。



手入れをされずに軒先にかかるトゥムヤイ

魚が集まり始めたと、うれしそうに語るウドムだが、一方で村で失われつつあるものは大きいと言う。「世銀が融資しなければ、パクムンダムは作られていないでしょう。25年といえば、生まれた子が大人になるまでの時間。村の若者は、川や魚を知らない。トゥムヤイの工夫も、失われるばかりだ」。

### ダムの神話

作ったダムを放棄しよう、というパクムンダムの影響住民の運動はメコン河全体で見ても唯一のケースだ。中国はメコン河を国内河川としてダム建設を続けている。ラオス以下のメコン河下流域でも、2004年に世銀がラオスのナムトゥン第2ダムの支援を決めて以降、ダム建設が加速度的に進んだ。ムン川と同じように豊かな魚類層を誇ったラオスのセーバンファイ川からも、魚の姿が消えている。今、ラオスは下流のカンボジアやベトナムの懸念を振り切り、メコン河本流にサイヤブリダムを建設中で、更に魚の宝庫であるシーパンドン地域でドンサホンダムの計画も進めている。ベトナムは、メコン河本流ダムに苦言を呈しているが、自らもメコン河の支流のセコン、セサン、スレポック川でダム建設を進める。この3河川でも下流のカンボジア領内での漁業被害が報告されている。

一方、世界で最初に大型のダムを作り始めた

アメリカでは、環境影響の大きいダムは次々と撤去されている。ダムの環境・社会影響が明らかになるにつれ、世界銀行やアジア開発銀行、日本政府の援助はダム建設の場からは徐々に姿を消しつつある。だが、パクムンダムの経済・社会的失敗が明らかになった後も、各国政府は、ダムによる経済発展が既成事実であるかのように主張する。融資や投資の主役は、中国やタイ、ベトナムの官民の資本にとってかわられ、環境・社会への影響の関心は以前より低くなっているように見える。

### 被害を正しく評価すべき時

融資から25年経っても、パクムンダムの影響住民は水門開放と今までの補償を求め、政府と交渉を続けている。歴代政権同様、軍事政権の態度は住民に同情的とは言えない。

世界銀行に対して何か言いたいことがあるかと聞くとアランヤーは、「タイ政府に5年間水門を開けて、今までの補償をするよう伝えてほしい。それ以上のことは何も望まない」、と彼女はいう。

アランヤーが今まで受けた損害を、かつて彼女が得た漁業補償世帯当たり3万バーツ/年で計算してみると、25年間は75万バーツになる。未だに被害を訴える影響世帯は2600世帯を超える。貧しい村人たちが発電と引き換えに、魚を獲る機会を喪失し、総額19億5千万バーツを負担しているに等しいと言えるだろう。パクムンダムから経済的利益があるなら、そこから補償すればいいのだろうが、話は簡単ではない。このダムは建設費用に予算の倍を費やした上、追加補償で更に莫大な費用がかかった。電力需要の高い乾季の発電量は少なく、バンコクのデパート5軒分の電力しか作りだしていない、と揶揄される。

住民は損害補償を受ける権利がある。補償はタイ政府だけでなく、世銀も責任を持つべきだ。

今は該当するスキームが世銀にないと言われるだろうが、莫大な環境・社会影響に加え、経済性もなかった事業を推進した責任を明確にすべきだ。

ダムのデメリットについて様々な貴重な教訓を世界に気づかせてくれたパクムンダムの影響住民も、あともう25年すれば高齢のため、口をつぐんでしまうかもしれない。だが、その時には、世界銀行の引いた道筋による環境と社会の破壊は、メコン河流域を覆い尽くしているだろう。魚がムン川で産卵できなくなったことで、パクムンダムは今もメコン河の生態系に計り知

れない負の影響をもたらしている。このダムがメコン河の生物多様性にとって、未だに脅威であり続けていることを、世界はもっと深刻にとらえるべきだ。これに対して、住民の提案する解決策はシンプルで、効果も保障されている。ただ、ダムの8つの水門を開けるだけでいいのである。世銀が貧困削減に取り組んでいるのが本当なら、自分たちが作り出した環境破壊と貧困に対して沈黙し続けることは許されないはずだ。(文中敬称略)

(木口由香/メコン・ウォッチ)



コータイ村のトゥムヤイの漁場 (2007年撮影)